

児童期・青年期における仲間関係の排他性, 対人受容性, 仲間集団の閉鎖性の関係性に関する研究

松本 恵美*

本研究は、児童期および青年期における「仲間関係の排他性」に影響を及ぼす要因について明らかにすることを第一の目的とし、要因として個人要因である「対人受容性」と環境要因である「仲間集団の閉鎖性」を取り上げ検討した。また、対人受容性に影響を及ぼす要因について検討することを第二の目的とし、要因として「他者との関わり経験」「興味・関心の広さ」「自尊感情」を取り上げ検討した。小学5年生と中学2年生を対象に分析を行った結果、「仲間関係の排他性」には、「対人受容性」が負の影響、「仲間集団の閉鎖性」が正の影響を及ぼしていること、「対人受容性」には「他者との関わり経験」と「興味・関心の広さ」が正の影響を及ぼしていることが示された。この結果から、児童期にも青年期の仲間関係への介入方法として、対人受容性へのアプローチと仲間集団の閉鎖性へのアプローチの両方が重要であることが示唆された。

キーワード：仲間関係, 排他性, 受容性, 閉鎖性, 自尊感情

I. 問題と目的

児童期から青年期にかけては、親からの心理的離乳により、精神的依存の対象が親から仲間に移行していく時期である。そのため、仲間関係は家族集団に代わって社会化のエージェントとして重要な役割を果たすようになる。また仲間関係は、社会化経験の基礎となるとともに、自己の確立、情緒的満足や心理的充足を得る上でも重要な役割を果たしている(住田, 1995; 國枝・古橋, 2006; 松永, 2011)。しかし一方で、仲間関係が与えるネガティブな影響として、仲間や仲間集団から否定され孤立することによって引き起こされる自尊心の低下や孤独感および問題行動の増加などがある。仲間との間におけるトラブルをうまく対処できず、良好な仲間関係を保つことができなくなると、それが原因で仲間外れやいじめに繋がったり、精神的に不安定になり不登校に繋がったりすると考えられる。特に小学校高学年から中学校にかけての期間は、いじめや不登校などの問題が急増する期間であることが明らかになっており、この時期に良好な仲間関係を形成し保持することは重要な課題であると言える。

児童期および青年期の仲間関係の特徴として、少人数で構成される固定化された仲間集団を形成

*教育学研究科 博士課程後期

していることが挙げられる。仲間集団を形成していると、少人数の仲間と強く結びつき特定の友人に対する親密性が高まり、情緒的満足や心理的充足を仲間から得ることができる。しかし一方で、自集団以外の他者や他集団を寄せ付けない強固な排他性をもつようになり、仲間関係におけるトラブルが起りやすくなる。排他性とは集団や関係において、「自分の仲間であるかどうかによって相手に対する態度を変えたり、自分の仲間と活動することに比べ、仲間以外の児童と活動することを楽しくないと感じたりする程度の強さ」と定義されている（三島，2004）。先行研究から、いじめのない学級に比べて、いじめのある学級では、仲間関係がより親密であり、仲間でない者同士の関係はより排他的であることや、排他性が高い児童は排他性が低い児童よりも学習中に受けるサポートが少ないことなどが明らかになってきており、排他性がいじめや仲間はずれ、学校適応の低下といった多くの問題と関わっていることが推測できる。このことから排他性の高まるこの時期に、仲間関係の排他性に影響を与える要因について検討することは有意義であるといえる。

仲間関係の排他性に影響を与える要因として、仲間集団や学級集団からの影響といった環境要因と個人の特性といった個人内要因が考えられる。しかし、これまでの先行研究では、排他性に影響を及ぼす要因として環境要因もしくは個人要因のどちらか一方のみを取り上げて検討しているものが多く、両側面の要因を取り上げた研究はあまりなされていない。そこで松本（印刷中）は、環境要因として仲間集団の閉鎖性、個人要因として対人受容性をとりあげ検討を行い、両要因が仲間関係の排他性に影響を与えていることを明らかにしている。これにより、仲間関係の排他性を抑制する上で、仲間集団の閉鎖性と対人受容性の両要因に介入することが有意義であることが示唆された。しかし、松本（2018）で使用されていた仲間集団の閉鎖性尺度のいくつかの項目において修正の必要性が示唆されており、尺度を修正して改めて要因間の関係性について検討する必要があると考えられた。また、仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因として取り上げた対人受容性には、「他者との関わり経験」と「興味・関心の広さ」が影響を与えていることが明らかになっている。そこで、これらの要因を含めて要因間の関係性について検討することとした。また、本研究では、対人受容性に影響を及ぼす要因に「自尊感情」を加え、検討を行うこととした。自尊感情は、自他の相互作用において、他者からの働きかけの認知や他者に対する反応に影響を与えることや（加藤・鷺見，2001）、自尊感情の高い者は、他者からの援助要請に気づきやすく、より積極的に援助行動をとる傾向があることが示されている（原田，1992）。このことから、自尊感情が高い者ほど、自分の周りの人々や環境について理解を示し、孤立してしまっている他者に手を差し伸べ、他者を受け入れようとする気持ちが高いことが考えられる。以上の考えから、本研究では、他者との関わり経験、興味・関心の広さ、自尊感情が対人受容性に影響を与え、対人受容性と仲間集団の閉鎖性が仲間関係における排他性に影響を与えるというモデルを想定し（Figure 1）、要因間の関係性について検討することを目的とした。また、児童と生徒では、仲間集団の特徴が異なるとされており（保坂・岡村，1986）、その違いによって排他性に与える影響にも差がみられることが考えられた。そこで本研究では、児童と生徒を対象とし、学年による要因間の関係性についても探索的に検討を行うこととした。

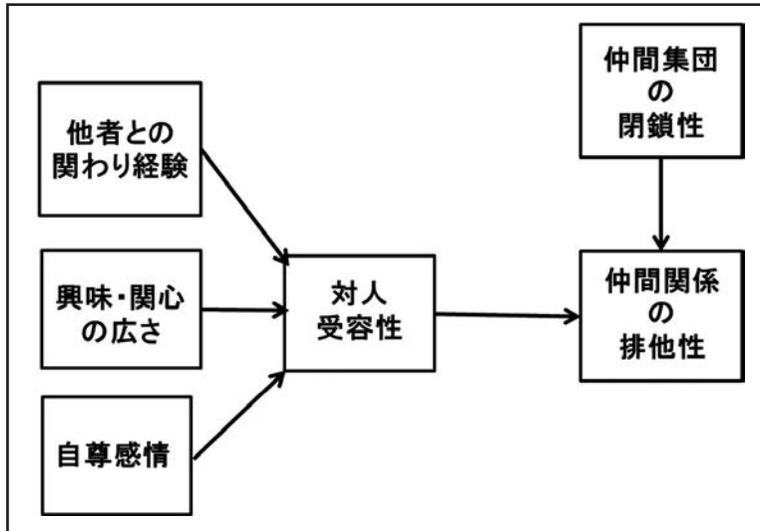


Figure 1 要因間の関係性モデル

Ⅱ. 方法

1. 調査対象者

公立小学校3校に通う小学生5年311名(男子151名, 女子160名), 公立中学校1校に通う中学2年生125名(男子67名, 女子58名)の合計436名を対象に調査を実施した。そのうち欠損値を含む生徒を除いた人数は368名であった(有効回収率84.4%)。学校で一緒に教室を移動したり, 休み時間に一緒に過ごしたりする「仲間集団」に所属していると回答した児童・生徒は315名であり, 全体の85.6%の児童・生徒が仲間集団に所属していた。

2. 調査実施時期

調査は2017年1・2月に実施した。

3. 調査方法

各学校の学校長および教頭に調査内容を説明し, 調査協力を依頼した。その際, 本調査の目的および方法, アンケート項目の説明を行い, 個人が特性されないこと, データは統計的に処理し本研究の目的以外に使用しないこと, 参加および中止は自由であり, 参加しないことでの不利益は一切生じないことを説明した。また, 事前に担任教師と打ち合わせを行い, アンケート内容の説明と, 実施する上での注意点などについて説明を行った。各クラスにおいて担任教諭によって集団で一斉に実施してもらった。実施にあたっては, 担任よりアンケートの説明および注意点についての説明を行ってもらった。また, 対象者には, 文書にて研究の目的, 匿名性の保証, 学校の教師や他生徒に見られる心配はないことを説明した。

4. 調査内容

(1)フェイスシート

基本属性として, 性別について回答を求めた。

(2)他者との関わりの経験尺度

松本(2016)で使用されていた他者との関わり経験尺度7項目を使用し, 個人が過去に, 自分とは異なる特徴を持つ他者とどのくらい関わったことがあるかを測定した。項目は, 「全然ない(1)」から「たくさんある(5)」の5件法で回答を求めた。

(3)興味・関心の広さ尺度

松本(2016)で使用されていた興味・関心の広さに関する7項目を使用した。個人の興味・関心の広さを測定するために, 他文化, 障害, 高齢者, 国際関係, 災害, 芸術, 政治の7領域についてそれぞれどのくらい関心があるか回答を求めた。項目は, 「関心がない(1)」から「とても関心がある(5)」の5件法で回答を求めた。

(4)自尊感情尺度

Rosenberg(1965)によって作成され, 古荘(2009)によって子ども用の表現に翻訳された尺度を使用した。項目は, 「全くあてはまらない(1)」から「とてもあてはまる(5)」の5件法で回答を求めた。

(5)対人受容性尺度

松本(2016)で使用されていた他者に対する受容性尺度を使用し, 他者との関わりにおいて, 自分と異なる特徴をもつ相手であっても受け容れようとする気持ちの強さを測定した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

(6)仲間集団の閉鎖性に関する尺度

松本(2017)で使用した仲間集団の閉鎖性尺度を石田・小島(2009)有倉(2011)などで使用されていた項目を参考に, 修正したものを使用した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

(7)仲間関係の排他性尺度

松本(2017)で使用した仲間関係の排他性尺度の項目のうち, 対人受容性のすべての項目との相関が.20以下であった項目1を削除した7項目を使用した。項目は, 「そう思わない(1)」から「そう思う(5)」の5件法で回答を求めた。

Ⅲ. 結果

1. 各尺度の内的整合性の検討

本研究で使用した尺度について内的整合性を検証するために, 主成分分析を行った。

(1)他者との関わりの経験尺度

主成分分析の結果, 第一主成分のみ検出された。因子寄与率は43.29%であり, 7項目すべてが.50以上の正の負荷量を示していたため, この主成分を「他者との関わり経験」を表す主成分と解釈した。また, 7項目の信頼性も $\alpha = .78$ であり, 十分な信頼性が得られたと判断し, 7項目すべてを採用し分析を進めた。

(2)興味・関心の広さ尺度

主成分分析を行ったところ, 第一主成分のみ検出された。因子寄与率は50.51%であり, 7項目す

べてが.60以上の正の負荷量を示していたため、この第一主成分を「興味・関心の広さ」を表す主成分と解釈した。7項目の信頼性は $\alpha = .84$ であり、十分な信頼性が得られたと判断し、7項目すべてを採用し分析を進めた。

(3)自尊感情尺度

主成分分析を行ったところ、第二主成分まで検出された。第一主成分において、第6項目「もうすこし自分を尊敬できたらいいと思う。」以外のすべての項目において.40以上の正の負荷量を示していたため、この主成分を「自尊感情」を表す主成分であると解釈した。10項目の信頼性は $\alpha = .72$ であり、信頼性が高いとはいいがたいが、十分な信頼性が示されたと解釈した。先行研究において10項目すべてが使用されていたことから、本研究でも10項目すべてを採用し分析を進めた。

(4)対人受容性尺度

主成分分析を行った結果、第一主成分のみ検出された。因子寄与率は51.31%であり、6項目すべてが0.60以上の正の負荷量を示していた。よって、この主成分を「対人受容性」を表す主成分と解釈した。また、6項目の信頼性は $\alpha = .81$ であり、十分な信頼性が得られたと判断し、6項目すべてを採用し分析を進めた。

(5)仲間集団の閉鎖性に関する尺度

主成分分析を行った結果、第二主成分まで検出された。第一主成分において、8項目すべてが.40以上の正の負荷量を示していたため、この第一主成分を「仲間集団の閉鎖性」を表す主成分と解釈した。第一主成分の因子寄与率は39.01%であった。また、8項目の信頼性は $\alpha = .78$ であり、高くはないが十分な信頼性を得られたと判断し、8項目すべてを採用し分析を進めた。

(6)仲間関係の排他性尺度

主成分分析を行ったところ、第一主成分のみ検出された。因子寄与率は51.52%であり、7項目すべてが0.50以上の正の負荷量を示していた。よって、この主成分を「仲間関係の排他性」を表す主成分と解釈し分析をすすめた。また、7項目の信頼性は $\alpha = .84$ であり、内的整合性は十分であると判断し、7項目すべてを採用し分析を進めた。

2. 各尺度の基本統計量と学年差・性差

各尺度の基本統計量と学年差・性差を算出した。各尺度について学年と性別を要因とする2(小学5年生・中学2年生)×2(男子・女子)の2要因分散分析を行った。各尺度の尺度得点、および標準偏差をTable 1に示す。他者との関わり経験尺度においては、性別の主効果、学年の主効果、交互作用のすべてが認められなかった。興味・関心の広さ尺度においては、性別の主効果が見られ($F(1,364) = 4.91, p < .05$)、学年に関わらず女子の方が男子より興味・関心が高いことが示された。自尊感情尺度においては、学年の主効果の有意傾向が見られ、小学5年生の方が中学2年生より自尊感情が高い傾向にあることが示された。対人受容性尺度においては、性別の主効果、学年の主効果、交互作用のすべてが認められなかった。また、仲間集団の閉鎖性においても、性別の主効果、学年の主効果、交互作用のすべてが認められなかった。仲間関係の排他性尺度においては、学年の主効果が見られ

($F(1,364) = 10.57, p < .01$), 性別にかかわらず, 中学2年生の方が, 小学5年生より仲間関係の排他性が高いことが示された。

Table 1 各尺度得点と標準偏差

	小学5年生			中学2年生			全体		
	男子	女子	全体	男子	女子	全体	男子	女子	全体
	M(SD)								
他者との関わり経験	3.61 (.70)	3.56 (.70)	3.58 (.70)	3.55 (.77)	3.45 (.79)	3.50 (.78)	3.60 (.72)	3.53 (.72)	3.56 (.72)
興味・関心の広さ	3.17 (.80)	3.23 (.78)	3.20 (.79)	3.06 (.91)	3.41 (.59)	3.23 (.79)	3.14 (.83)	3.27 (.74)	3.21 (.79)
自尊感情	2.88 (.71)	2.93 (.58)	2.91 (.64)	2.69 (.72)	2.82 (.67)	2.76 (.69)	2.82 (.72)	2.90 (.60)	2.86 (.66)
対人受容性	3.49 (.78)	3.70 (.82)	3.60 (.81)	3.57 (.72)	3.69 (.69)	3.63 (.70)	3.52 (.76)	3.69 (.79)	3.61 (.78)
仲間集団の閉鎖性	2.28 (.76)	2.12 (.80)	2.23 (.77)	2.18 (.79)	2.32 (.78)	2.22 (.79)	2.23 (.78)	2.23 (.79)	2.23 (.78)
仲間関係の排他性	2.63 (.85)	2.45 (.87)	2.53 (.87)	2.86 (.83)	2.87 (.93)	2.87 (.87)	2.69 (.85)	2.56 (.91)	2.62 (.88)

3. 対人受容性・仲間関係の排他性・仲間集団の閉鎖性の関係性

要因間の関係性について検討するために, 他者との関わり経験, 興味・関心の広さ, 自尊感情が対人受容性に影響し, 対人受容性と仲間集団の閉鎖性が仲間関係の排他性に影響を及ぼすというモデルを想定し (Figure 1), 共分散構造分析を行った。その結果, モデルの適合度指標は, $GFI = .972, AGFI = .917, CFI = .912, RMSEA = .07$ であり, 十分な値示された。まず対人受容性について見ると, 対人受容性には他者との関わり経験 ($\beta = .25$), 興味・関心の広さ ($\beta = .36$), および自尊感情 ($\beta = .10$) が影響を及ぼしていることが示された。これにより, 他者との関わり経験が多いほど対人受容性が高いこと, 興味・関心の広さが広いほど対人受容性が高いこと, 自尊感情が高いほど対人受容性が高いことが明らかになった。次に, 仲間関係の排他性について見ると, 対人受容性 ($\beta = -.37$) と仲間集団の閉鎖性 ($\beta = .30$) から影響を受けていることが示された。この結果から, 対人受容性が高まると, それに伴って排他性が減少する一方で, 仲間集団の閉鎖性が高まると, 仲間関係の排他性が高まることを示された。

また, 要因間の関係性に学年による違いが見られるかについて検討するために, 学年による多母集団分析を行った。小学5年生と中学2年生におけるパラメータ間の有意差について検討したところ, 小学5年生と中学2年生との間でパス係数の有意差は認められなかった。そこで, パス係数に等値制約をかけて, 再度分析をしたところ, モデルの適合度指標は $GFI = .964, AGFI = .925, CFI = .914, RMSEA = .047, AIC = 137.288$ であり, 十分な値が示された。なお, 値制約をかけないモデルと等値制約をかけたモデルと比較したところ, 等値制約をかけたモデルの方が, 適合度が良かったため, 制約をかしたモデルを採択した。結果は, Figure 2に示した通りである。数値はいずれも標準化したパス係数と相関係数を示した。この結果から, 小学5年生と中学2年生のどちらの学年においても, 同一のモデルが適用できることが明らかになった。

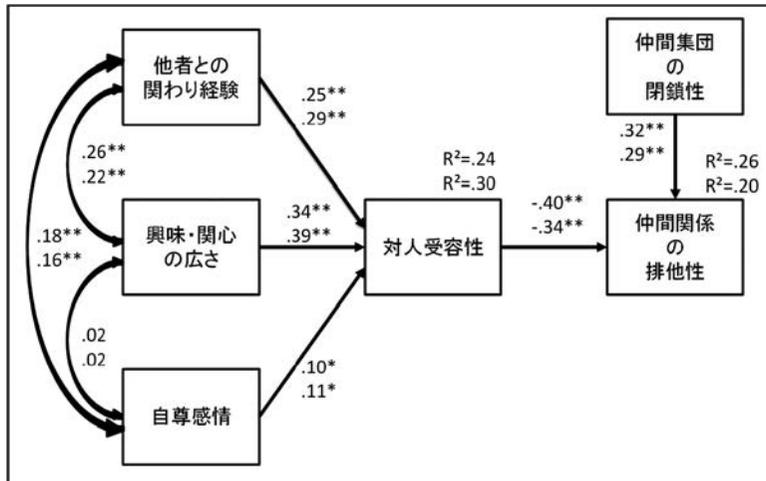


Figure 2 多母集団同時分析の結果

IV. 考察

1. 対人受容性に影響を及ぼす要因についての検討

対人受容性に影響を及ぼす要因として他者との関わり経験, 興味・関心の広さ, および自尊感情を取り上げ検討した。分析の結果, 他者との関わり経験が多い児童・生徒ほど, 対人関係における受容性が高いことが示された。これは松本(印刷中)を支持する結果であった。これにより, 様々な特徴を持つ他者との関わり経験を多くしていると, 自分と異なる特徴を持つ他者に対する否定的な考えが減少し, 相手を受け入れる気持ちが高まることが示唆された。また, 幅広い興味・関心をもっている児童・生徒ほど対人関係において受容性が高いことが示された。この結果も松本(印刷中)を支持する結果であった。幅広い領域に対して興味・関心を示している児童・生徒は自分と異なる特徴を持つ他者に対しても積極的に関わっていきこうとする気持ちが高いため, 対人受容性の高まることが示唆された。一方で自尊感情については, 対人受容性への正の影響が示されたものの, その影響は小さいことが示唆された。以上の結果から, 対人関係における受容性を高めるには, 他者との関わり経験を増やすというアプローチおよび興味・関心の幅を広げるというアプローチが有効であることが示唆された。

2. 対人受容性・仲間関係の排他性・仲間集団の閉鎖性の関係性についての検討

仲間関係の排他性に影響を及ぼす要因として環境要因である仲間集団の閉鎖性と個人要因である対人受容性を取り上げ検討した。結果から, 対人受容性が高い児童・生徒ほど, 仲間関係の排他性が低いことが示された。これにより, 対人関係における受容性を高めると, それに伴って他者を拒否したり否定する気持ちを減少させることができることが示唆された。また, 所属している仲間集団の閉鎖性が高い児童・生徒ほど, 仲間関係の排他性が高いことが示された。これにより, 仲間集団の閉鎖性が高まると, それに同調するように所属している児童・生徒の仲間関係の排他性も高く

なることが示唆された。この結果は松本(印刷中)と同様の結果であり、このモデルは頑健性が高いことが確認された。また、要因間の関係性について学年差を検討したところ、小学5年生と中学2年生の間でパス係数に有意差は示されず、学年による違いは見られなかった。このことから、このモデルは児童期にも青年期にも適用可能であることが確認された。これらの結果から、仲間関係のトラブルを解決する介入方法として、対人受容性へのアプローチと仲間集団の閉鎖性へのアプローチの両方が重要であることが示唆された。

3. 本研究の課題と今後の展開

本研究の結果から、児童期と青年期において、他者との関わり経験と興味・関心の広さが対人受容性に影響を与え、対人受容性と仲間集団の閉鎖性が仲間関係の排他性に影響を与えるという関係性が示されることが明らかになった。児童期から青年期にかけての安定した要因間の関係性について示されたが、要因間の発達の側面については明らかにすることができず、課題として残された。特に、仲間関係の排他性については児童期から青年期にかけて増加することが示されたが、本研究の結果からはどのようなメカニズムによって仲間関係の排他性が増加したのかについて明らかにすることができなかった。

仲間集団の集団規範に対する理解と認知能力に関する先行研究によると、6歳ごろから子どもたちは集団内のメンバーは集団規範に従わなければならないことや、集団規範に従わない仲間から否定的な評価を受けることに気づくようになり、児童期中期以降、集団内の同一性を重視するようになることが明らかになっている。それと同時に集団規範が洗練されていき、多くの児童・生徒はそれに基づいた差別的な判断をするようになることが指摘されている(Abrams, Rutland, Cameron, 2003)。このことから、認知能力の発達とともに自集団と外集団の区別を強く認識し、それが排他性の学年差に影響をあたえていることが考えられた。その点で、排他性の発達の变化にどのような要因が影響し、変化が見られたかについてさらなる検討が必要であると考えられる。

また、仲間関係の排他性を減少させるアプローチ法として、個人内要因である対人受容性に介入する方法と個人間要因である仲間集団の閉鎖性に介入する2つの方法が可能性として挙げられたが、実際にこの2要因にアプローチすることが仲間関係の閉鎖性の減少につながるかは明確になっていない。よって、今後の展開としては、実際に介入研究を行い、対人受容性と仲間集団の閉鎖性の変化が仲間関係の排他性にどのような効果を与えるのか、またどのような支援や介入が最も効果的なのかについて検討することも必要であると考えられる。

引用文献

- Abrams, D., Rutland, A., & Cameron, L. (2003). The development of subjective group dynamics: Children's judgments of normative and deviant in-group and out-group individuals. *Child Development*, 74, 1840-1856.
- 原田純治. (1992). セルフ・エスティームの心理学. ナカニシヤ出版, 156-161.
- 保坂亨・岡村達也. (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討. *心理臨床学研究*, 4,

15-26.

- 石田靖彦・小島文(2009). 中学生における仲間集団の特徴と仲間集団との関わりとの関連:仲間集団の形成・所属動機という観点から. 愛知教育大学研究報告教育科学, 58, 107-113.
- 加藤乃武英・鷺見克典(2002). 対人関係における相恵性におよぼす自尊感情の影響:Robson 多次元自尊感情尺度を用いた検討. 名古屋工業大学紀要, 53, 195-206.
- 國枝幹子・古橋啓介.(2006). 児童期における友人関係の発達. 福岡県立大学人間社会学部紀要, (15), 105-118.
- 松本恵美.(2015). 児童期と青年期における対人受容性に関する研究. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 64, 105-116.
- 松本恵美.(2016). 児童期と青年期における対人受容性の規定要因に関する研究:他者との関わり経験, 興味・関心, 知識との関連について. 東北教育心理学研究, 14, 11-20.
- 松本恵美.(印刷中). 児童期と青年期における受容性と排他性に関する研究:仲間集団の閉鎖性に着目して. 学校メンタルヘルス, 第21巻1号.
- 松永あけみ.(2011). 児童期における友人関係理解の発達の变化:小学1年生から3年生の縦断的作文の分析を通して. 群馬大学教育学部紀要人文・社会科学編, 60, 215-221.
- 三島浩路.(2004). 友人関係における親密性と排他性:排他性に関する問題を中心にして. 名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要心理発達科学, 51, 223-231
- 住田正樹.(1995). 子どもの仲間集団の研究. 福岡. 九州大学出版
- 有倉巳幸.(2011). 生徒の仲間集団の排他性に関する研究. 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 21, 161-172.

The relationship of interpersonal acceptability and peer group exclusivity to interpersonal exclusivity in children and adolescents

Emi MATSUMOTO

(Graduate Student, Graduate School of Education, Tohoku University)

The purpose of this study was to examine the effect of “the interpersonal acceptability” and “the peer group exclusivity” on “the interpersonal exclusivity”. Second purpose was to examine the effect of “the degree of interpersonal experience”, “the width of interests”, and “self-esteem” on the interpersonal acceptability. Subjects were 311 (151 boys, 160 girls) fifth grade students and 125 (67 boys, 58 girls) eighth grade students in Japanese public schools. Main results were as follows: (1) Students who had higher interpersonal acceptability possessed lower interpersonal exclusivity. (2) Students who had higher peer group exclusivity possessed higher interpersonal exclusivity. (3) Students who had more experience of the interaction with various people and wider interest possessed higher interpersonal acceptability. It was suggested that it is important to increase the interpersonal acceptability and to decrease the peer group exclusivity.

Keywords : Interpersonal acceptability, Exclusivity, Peer group exclusivity, Peer relationship